Benesse®

表紙／裏表紙
東京都●
白金台幼稚園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

次号（秋号）は2014年10月上～中旬発刊（予定）です。

これからの幼児教育 2014 夏
2014年5月31日発行 発行人 谷山和成 編集人 小泉和義 発行所 株式会社ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Holdings,Inc. 2014

全国の園長先生に無料で年3回お届けしています

2014 夏 Summer

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

第1特集
幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か
園内研修で活用できる事例つき

聖心女子大学文学部教育学科教授 **河邉貴子**

第2特集
先生同士の「同僚性」を高める

データ
データから見る 園運営の今

園内で回覧してください

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp

これからの幼児教育 2014 夏 Summer CONTENTS

2 第１特集

幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か

2 インタビュー
子どもを理解し、「遊びの質」を高める２つの軸と５つの視点
聖心女子大学文学部教育学科教授 河邉貴子

6 ケーススタディー
園内研修での学び合いから園全体で遊びの質を高める

12 ベネッセ教育総合研究所・CRN合同主催　ECEC研究会　開催報告
園の先生と研究者が立場を越えて、「遊びの質を高める保育」について熱く議論

14 データから見る幼児教育
データで見る　園運営の今

20 第２特集

先生同士の「同僚性」を高める

20 はじめに●同僚性とは何か？
同僚性は保育者の専門性向上のカギ
広島大学大学院教育学研究科准教授 中坪史典

21 座談会
学び合う風土をつくるために園長は何をすればよいのか？
はっと保育園（兵庫県・私立保育園）　園長 片山喜章
かえで幼稚園（広島県・私立幼稚園）　園長 中丸元良
広島大学大学院教育学研究科准教授　中坪史典

25 Reader's Voice／編集後記

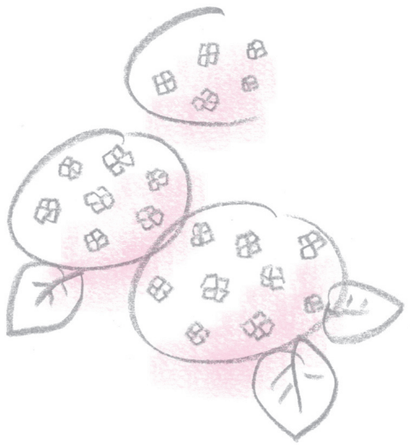
「これからの幼児教育」ウェブサイトでは
全ての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ
2014年 春号 集団の中で「主体性」を育むために園ができること
2013年 秋号 園の保育観を入園前の保護者にもわかりやすく伝えるには？
2013年 夏号 子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる
※本誌は最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

※ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

はじめに



子どもたちは友だち関係が少しずつ安定し、園生活も落ち着いてきた頃だと思います。先生がたは、さらに遊びや友だち関係が充実していくように援助や環境づくりを日々考えられているところではないでしょうか。

保育制度や社会が大きく変わっている今、子どもたちによりよい育ちや学びを保証し続けることがこれまでに以上に求められます。そこで、今回の第１特集では園生活の中核を成す「遊び」に焦点を当てました。子どもの学びにつながる「遊びの質」についての専門家の解説とともに、保育者同士で語り合っていただく材料として、ふたつの事例をご紹介します。

また、第２特集では、保育者の「同僚性」について考えます。遊びの質、保育の質を高めていくためには、ともに子どもを支える仲間同士での「学び合う風土」が必要です。異動や採用などで新しい仲間を迎えた園も多くあると思います。新年度がスタートした今だからこそ、ご覧いただきたい記事です。

遊びが豊かになるほど、また保育者同士の同僚性が高まるほど、保育の質は向上します。子どもの育ちのために今号の記事をお役立ていただければ幸いです。

『これからの幼児教育』編集長　橋村美穂子

幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か

子どもの生活の中核を成す「遊び」。
保育者は子どもの「遊び」を、どのように考えればよいのでしょうか。
子どもの学びへとつながる「遊びの質」について専門家の解説、さらに園内研修での取り上げ方をケーススタディー形式でご紹介します。

インタビュー

子どもを理解し、「遊びの質」を高める2つの軸と5つの視点

遊びの質を高めるためには、まず遊びとはどのような行動を指し、子どもにとってどのような意味をもつのかを理解する必要があります。聖心女子大学教授の河邉貴子先生が遊びの構造を明らかにするとともに、具体的な援助のあり方を提示します。

「遊び」とは何か 質を高める援助のあり方とは

まず初めに、「遊び」とは何か、掘り下げて考えてみましょう。

遊びの定義は、「①自発性（自分からすること）」「②自己完結性（満足するまですること）」「③自己報酬性（「楽しい」という感覚など自分に報酬を与えること）」の3つに集約されます。しかし、これらだけでは、一日中テレビゲームに没頭するケースも当てはまるため、他の要素も合わせる必要があるでしょう。それが何であるかは、遊びの構造を考えると、おのずと見えてきます。

遊びの中で子どもはわくわくした緊張感や達成感、あるいは開放感や充実感を味わいながら、ある種の能力や見通しを獲得していきます。出発点は興味・関心をもった身近な環境との関わりであり、遊び手の自発性に支えられて展開していきます。

自発性は、おもしろい・楽しいといった「快」の感情とわかちがたく、子どもは遊びをもっとおもしろくしようと、ヒト・モノ・コトに主体的に関わろうとします。関わりが深まるにつれ、遊びのおもしろさは増し、興味・関心がさらに高まるという循環が生まれます。この繰り返しにより、子どもは発達に必要な経験を積み重ねていきます。そして、遊べば遊ぶほど能動的な学び手として成長し、その後の成長を支える土台がつくられていくのです。こうしたプロセスの深まりが、遊びの質の高まりをもたらします。

遊びはパターン化により停滞するため、随時、新しさを取り込み、よりおもしろくするプロセスが重要になりますが、それは子どもの力だけでは難しく、大人の援助が必要になります。そこに保育者の最大の存在意義があるのです。

聖心女子大学文学部教育学科教授
河邉貴子 かわべ・たかこ

◎主な研究テーマは、保育記録のあり方や遊び援助論。東京都公立幼稚園で12年間教諭として幼児教育に携わった経験をもつ。2008年改訂の幼稚園教育要領解説作成協力者、中央教育審議会専門委員（初等中等教育分科会）などを歴任。著書に『子どもごころ―幼児が生きている豊かな時間』（春秋社）など。

保育者に求められるのはまず、遊びが保育の中核であり、遊びの質を高めることが子どもの発達の保証につながるという認識をもつことです。そのうえで子どもがヒト・モノ・コトにどう関わろうとしているかをよく観察、理解し、その延長上に援助の可能性を見いだすなど保育環境をデザインする必要があります。

遊びを中心とした保育がなぜ定着しないのか

これまでも多くの人が「遊びが大事」と言い続けてきました。そのことに真っ向から異論を唱える人はいないにもかかわらず、さまざまな理由により、遊びを中心とした保育は必ずしも定着しているとは言えません（図1）。

新制度が動き始めると、保護者の選択の幅が広がり、結果を「アピール」しやすい保育に流れてしまうかもしれません。そうなると、子どもにとっての最善の利益である、豊かな遊びによる日々の生活の充実が得られにくくなるのではという危機感を抱いています。社会が大きく変わりつつある今、子どもにとって、どのような生活や保育が大切なのかを、改めて考える必要があるのではないでしょうか。

保育現場における遊びの位置づけは、3つのパターンに大別できます。

ひとつめは、遊びを教育内容として位置づけているのですが、保育者間で遊びの質のとらえ方が共有されていないタイプの園です。保育者間の考え方のすり合わせができておらず、環境構成や援助の手立ての個人差が大きいといった問題が見られます。

ふたつめは、「遊びは子どもの自発性によるもの」という考え方に縛られ、ともすれば「放任」になってしまっているタイプの園です。子どもは同じ遊びを繰り返し、遊びが停滞してしまいます。

3つめは、遊びを教育内容ととらえず、遊びが「休み時間」のようになっている園です。教育とは保育者が教授するものととらえているため、子どもが遊びのテーマや場、仲間を自己選択し、課題解決に向かう活動が展開されにくくなっています。そのため、子どもの主体性が発揮される場面は少ない状態です。

このような現状で、遊びの重要性を伝えていくには、まず遊びと学びの関係性への理解を求める必要があるでしょう。

遊びの中での子どもの内面の変化を観察すると、遊びと学びの原理は重なっていることに気づかされます。子どもは、初めから明確な目標をもって遊ぶのではありません。対象と関わる中で、次第にやりたいことの方向が明らかになり、見通しをもって遊びを展開させていきます。これは、「混沌（こんとん）」の中に「秩序」を見いだす営みであり、学びそのものと言えます。

遊びの重要さを説く上では、目の前の子どもの姿を通して語るだけではなく、将来的な有用性を説明することも大切でしょう。これについては、既に多くの研究により根拠が示されています。一例を挙げると、鳥取大学の研究「すくすくコホート鳥取」では、幼児期からの追跡調査により、社会性や学力などの観点から幼児期の遊びの重要性を指摘しています。

適切な環境の提示により遊びは発展し、多様化する

では、「遊び」の質を高める援助はどのように行われるべきか、実践を交えて説明しましょう。

記録的な大雪に見舞われたあと、関東のある幼稚園を訪問すると、子どもたちは園庭で雪遊びを楽しんでいました。さまざまな遊びが展開されていましたが、5歳児のグループは屋外に置かれたマットの形によってできた雪の塊を発見し、ひとりの「マカロンみたい」という言葉をきっかけにマカロン作りが始まりました。様子を見守っていた保育者は、ある子どもの「マカロン屋さんをしよう」という言葉に反応し、絵の具を使うことを提案しました。保育者

図1 遊びを中心とした保育が定着しない背景

社会的な背景	• 目に見える成果を求める風潮 • 園児獲得のための方略も無視できない • 社会、保護者に遊びの意義が理解されにくい
教育的な背景	• 子どもの自発性と保育者の計画性との関係の難しさ • 保育者の資質（子どもの理解力と指導力）

出典：第3回 ECEC 研究会　河邉先生講演資料より一部抜粋・改編

写真1
プラスチック製のフロアマットでできた雪の塊をマカロンに見立てて、お店屋さんごっこが展開されました。

の狙い通り、子どもは色つけに夢中になり、「これはストロベリー・マカロンね」などと遊びが展開されました（写真1）。

ほかにも、雪を投げるなど体全体で楽しんでいたグループのそばでは、保育者が共感を示すことで、子どもたちが安心して雪投げに没頭していました。また、かまくらづくりやソリ遊びでは、子どもたちの遊びに対するぼんやりとしたイメージをはっきりとさせる言葉をかけたり、技術的に難しいことを手助けしたりすることで、子どもたちは遊びのイメージやめあてがより深まり、遊び込めていました。

保育者の適切な援助があったからこそ、このように豊かに展開したのです。保育者は子どもが遊びの中で目指していることや体験していることを十分に読み取り、そのうえで、子どもの自発性や達成感を重視し、どう足場をかけるかを考えることが、遊びの質を高めるためには極めて重要です。

自ら遊びの中に入り遊びの輪郭を明瞭にする援助

次はひとりの子どもが目の前の興味のある遊びに入り込んでいく様子を見てみましょう。

Aくんは、ひとりでコマ遊びをしていましたが、それは本当にやりたいことではなかったようです。保育室にふたりの子ども（BくんとCくん）が入って来て、「本屋さんごっこをやろう」と、積み木でお店を作り、本を並べ始めました。保育者がB・Cくんに「すごいね」と声をかけるのを聞いたAくんは、本屋さん作りの手伝いを始めました。

保育者は、本屋さんができたタイミングを見計らってお店に入ります。そして「図書館カードを忘れたわ」と言うと、B・Cくんは「ここは本屋さんです」と反応しました。保育者が「そしたらお金を作るね」と製作コーナーに移動すると、Aくんはレジを作り始めました。「自分もやりたい」と、はっきりと言いませんが、もっと積極的に関わりたいようです。

その間、B・Cくんは、「本屋でクッキーを食べられるようにしよう」と、クッキーづくりに移行しました。レジを完成させたAくんは、「いちごクッキーはどう？」などと話しかけ、次第に活動の中心的な役割を担っていきました。

Aくんの姿を通して、遊びに能動的に関わる過程で、ヒト・モノ・コトへの関わりが深まっていく様子がよくわかります。さらに遊びの中で「次はどうしようか」という自己課題が生み出され、協同性も深まっています。こうした遊びの背後には、自ら遊びの中に入り、徐々に遊びの輪郭を明瞭にした保育者の援助があるのです。

図2 遊びの質を高める5つの視点

次の5つの視点から遊びのプロセスを観察することで、援助の手立てが検討しやすくなります。

❶目的意識の深化　環境とかかわる中で、遊びの目的意識はどんどん変化します。今、子どもがどのような目的（めあて）に向かっているかを注意して観察するようにします。

❷状況を再構成する力　遊びをよりおもしろくするために、子どもは絶えず状況をつくり直そうとします。子どもの力だけでは難しい場面では、援助が必要になるかもしれません。

❸環境への関わり　状況をつくり直すために、遊びに使うモノや場の必要性を認識し、主体的にかかわろうとします。保育者が新たな環境を提案する必要がある場面もあるでしょう。

❹情報の選択と自己決定　友だちの動きを見たり、言葉を聞いたり、どれだけ情報を収集しようとしているかに注意を払います。それにより、どのような自己決定をしているかも読み取るようにしてください。

❺他者とのコミュニケーション　自分の思いや考えを、友だちにどう伝えようとしているかを読み取ります。友だちに興味をもつことが、コミュニケーションの第一歩です。遊びが深まるほど、コミュニケーションも深まります。

2つの軸と5つの視点で子どもの遊びを読み取る

それでは、保育者はどのように具体的な援助の手立てを講じればよいのでしょうか。

私自身が保育者として現場にいた頃、豊かな遊びの展開に必要な要素として、「遊び課題」と「他者とのかかわり」という2つの軸を設定し、子どもをとらえていました。そして、一人ひとりの子どもが、2つの軸のどの位置にいるかを「グリッド型記録」と命名してときどき整理していました（図3）。

グリッド型記録は、4つの象限で子どもをとらえます。

【第1象限】仲間とのつながりを楽しみ、遊びに共通のイメージをもてる。遊びが停滞すると、イメージを出し合いおもしろくしていく。

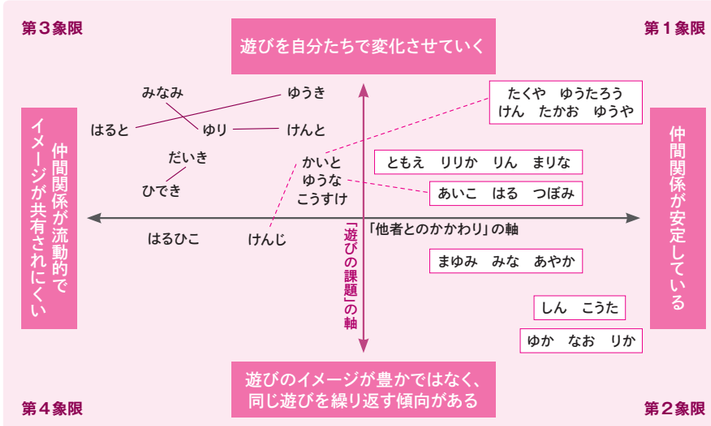
【第2象限】友だち関係は安定しているが、遊びをおもしろくつくり変える経験が少なく、同じ遊びを繰り返しやすい。

【第3象限】安定した仲間を築いておらず、遊びの充足感を十分に味わえない。

【第4象限】遊びに対する意欲や主体的態度が不十分。また友だち関係も安定しておらず、遊びの課題をもちにくい。

これをもとに援助の大まかな方針を検討しました。例えば、第1象限の子どもは、少し引いた場所から見守り、困ったときに手を差し伸べれば大丈夫。一方、第4象限は常にしっかりと向き合い、能動的な学び手にする援助を続ける必要がある、といった具合です。集団の保育では、一人ひとりの子どもを理解するとともに、こうした類型的な見方も必要だと感じます。

図3 「遊び課題」と「他者とのかかわり」の2軸でとらえるグリッド型記録



続いて、一人ひとりへの具体的な援助は、5つの視点を踏まえて検討しました。「①目的意識の深化」「②状況を再構成する力」「③環境へのかかわり」「④情報の選択と自己決定」「⑤他者とのコミュニケーション」です（前ページ図2）。

2つの軸で大きくとらえ、5つの視点で詳細に分析するという方法で、遊びの質を高める援助を生み出していたのです。

保育の中では、生活や遊びが単発的、分断的にならないようにしたいということを、特に強調したいと思います。そうしないと、子どもが生み出す文脈はつながりません。保育は「プロセスが大事」なのです。今日の体験から明日の興味が生まれるような連続的な生活を送るために、子どもと保育者が相互にかかわってつくり出す遊びのプロセスを重視していただきたいと思います。

現場のみなさんへ

◎遊びを大事にした保育をする方が、子どもはうれしくなるし、そんな姿を見ている保育者も楽しくなるでしょう。その物語を伝えれば、保護者も喜ぶでしょう。遊びを中心とした保育は、全ての人を幸せにすると思います。逆に、できることを求める保育では、できないことが目についてしまいますし、保護者に「わが子はできない」という悩みを生み出してしまうかもしれません。

最もリスクが少ない状態で多くのことを学べるのが、遊びです。小学校以降の教科学習とは違い、最大限に自己発揮できるゆとりがある幼児期の遊びは、この時期だからこそできる学習方法なのです。何かを身につけさせようと慌てずに、遊びを充実させることを目指していただきたいと思います。

ケーススタディー

園内研修での学び合いから園全体で遊びの質を高める

園全体で遊びの質を高める援助を実現するために、園内研修を取り入れてみましょう。
次ページ以降の事例を活用して、保育者同士の学び合いを活性化しましょう。

3つのステップで園全体の遊びを豊かにする

遊びの質を高める援助は、遊びを読み取る力を高め、援助の方向を探ることで充実します。そのためには個人で取り組むより、複数の保育者が同じ場面を共有し、「自分はこう読み取った」「こんな援助も考えられる」といった意見を交わし合う園内研修が有効です。

遊びをテーマとした園内研修は、次の３段階のステップで進めるのが効果的と、河邉先生は説明します。

「最初に、**❶保育者の遊びに対する意識を把握**します。遊びの意味について話し合うなどして、まず共通理解を図りましょう。それをクリアしたら、**❷具体的な子どもの姿を通して遊びの中で何を経験しているかを考える**研修に移ります。そして次は、**❸遊びをより豊かにするためのプロセスをみがく**研修です。ここでは、『環境はどうあるべきか』『子どもの変化をどう見るか』など、それぞれのプロセスを検討して高めていきます」

多くの園で壁となるのは、最初に遊びに対する意識の変革を促すステップだと言います。

「経験だけに基づいた保育をしていると、遊びの意味を見誤ることがあります。経験から少し離れ、『遊びを通して何が得られるか』『どうすれば遊びが深まるか』といったことを理論的に学び、実践してみることも大切です。そうすると遊びへの理解が深まり、『一日中、当たり前のように部屋の真ん中に置かれていたテーブルが、実は遊びの邪魔になっているのではないか』などと気づくようになります」（河邉先生）

結論を導くよりも一人ひとりの気づきを重視

次ページ以降の事例を活用した園内研修の進め方を説明しましょう。

【STEP.1】事例を通し、それぞれの保育者が感じたことを発表して共有します。付箋紙を用いると意見が出しやすいでしょう。

【STEP.2】ファシリテーターが中心になり、意見を整理します。その際、２つの軸と５つの視点（５ページ）を意識すると整理しやすいでしょう。

【STEP.3】２つの軸、５つの視点をもとに、話し合いを進めます。

【STEP.4】研修を通した気づきを、実際の保育にどう生かすかを考えます。

磯部氏は研修の注意点を次のように話します。

「結論を導くのが目的ではありません。あくまで一人ひとりが何かを感じ取ることを重視しましょう」

監修

聖心女子大学文学部
教育学科教授
河邉貴子

ベネッセ
教育総合研究所
顧問
磯部頼子

ケース１　＜事例を基に、「遊びの質」の高め方を考えてみましょう＞　事例提供◎河邉貴子

色水遊びに夢中の子どもの思いをより形にするための援助

場面❶ ジュース屋さんごっこで遊ぼう！

Ａ園は、ハーブ園を作ったり、木の実や花々を植えたり、園庭での遊びが充実するような工夫が随所に見られます。春の花が咲き終わった時期に、花がらを使った色水遊びに子どもたちの関心が集まり、いつでも誰でも色水遊びができるように園庭にテーブルを出し、すり鉢、すりこぎ、透明の容器、ザル、ビン、ペットボトルなどの環境を用意していました。

Ｂくんが登園したとき、既に数人の子どもがテーブルに集まり、色水を作る遊びを始めていました。透明なカップに色水を作り、「ジュース屋さん」と言っている子どももいます。Ｂくんは自分でも色の出る木の実を拾ってすり鉢でつぶし、「ブドウジュースができた」とつぶやきました。

場面❷ 同じ作り方なのに、違う色の水ができた！

Ｂくんは色水をガラスの空き瓶に注ぎ、もう１本作り始めました。ところが２本目は１本目より少し色が薄くなりました。すると、色の違いの発見におもしろさを感じたのか、３本目はさらに薄い色を作りました。その姿から、色のグラデーションをつくり出すことがおもしろくなったようだと読み取った保育者（援助❸）は、Ｂくんの追求したい微妙な色の調整には目の細かい網が必要だと気づき、茶こしをそっと提示しました。Ｂくんは早速茶こしを使ってより丁寧に色水を作り始めました。

Ｂくんの熱中する姿に周囲の子どもがひきつけられ、「そのブドウジュースの実はどこにあるの？」と尋ねると、Ｂくんは手を止めて友だちを樹木まで連れて行きました。６本目は限りなく透明に近い色を作り、７本目は水だけを入れると、靴箱の上に色の濃い順に並べ、満足気に眺めました。次に保育室からセロハンテープ台を持ってくると、１本ずつセロハンテープを貼り、そこに油性ペンで自分の名前を書きました。「どうしてテープを貼ってから名前を書いたの？」と尋ねると、「テープをはがせば、（瓶は）また使えるから」と返ってきました。

話し合いの視点

◎Ｂくんの中で、遊びの目的はどのように変化しているでしょうか。
◎自分なら、どのような援助をしたと思うでしょうか。
◎ほかにどのような援助が考えられるでしょうか。

▶▶▶解説は次ページから！

ケース１　河邉先生と磯部氏による解説

子どもに選択権を残したモノの提示の仕方に保育者の思いがよく表れている

茶こしを提示していなかったら充足感は大きく低下していたはず

河邉　この事例は、私が実際に目にしたものです。遊びの目的は初めから明確なわけではなく、モノとのかかわりを通して、次第に深まっていくことが、Ｂくんの姿からよく伝わってきました。また、遊びの定義のひとつに、「自己完結性（満足するまですること）」がありますが、最後に並べた瓶を眺める表情は、とても満足している様子でした。

磯部　この事例のポイントは、何と言っても援助❶（7ページ）でしょう。遊びを読み取り、さらに発展させるために一番よいと思った道具を躊躇（ちゅうちょ）なく提示する援助が功を奏しています。このとき、保育者はどのような言葉をかけたのでしょうか。

河邉　「これを使ったら、もっとキレイになるよ」などとは言わず、「ここに置いておくね」と、そっと提示した感じでした。使うかどうかは子どもが選択すればよいというスタンスがまたすばらしいと思いました。もし、ここで茶こしを提示しなくても、Ｂくんは色水作りを続けたと思います。しかし、茶こしを使うよりも上手にグラデーションを作れなかったでしょうから、充足感は低かったでしょう。

磯部　茶こしを手にしたことで、自分の中のめあてがより明確になったのだと思います。熱中する姿がほかの子どもにも伝わり、遊びが広がる様子も見られます。最後の場面は、心の中で「よし！」とガッツポーズをするような気持ちだったでしょう。この事例では茶こしを上手に活用しましたが、この保育者は実際に自分も茶こしを使って遊んだ経験があったのかもしれません。また、日頃から子どもの遊びを想像しながら園内の環境に目を配るなどの努力をしていたのでしょう。

河邉　実はこのとき、保育者は茶こしを探し回り、わざわざ給湯室に取りに行きました。茶こしがあれば遊びが深まるという確信に近い思いがあったのでしょう。援助❶（7ページ）は非常によいと思いますが、さらに求めるなら、ほかの子どもに波及させる援助があるとよいと思います。例えば、帰りの時間に「Ｂくんはこんなことをしていましたよ。工夫したところを聞いてみましょう」と紹介するなどして、友だち同士の関心をつなげるといいですね。

園庭などの環境づくりへの配慮が遊びをますます豊かに

磯部　この園は、まわりの環境への向き合い方もすてきだと感じました。園庭に花がら、木の実があり、何気なく手に取れるような環境も大切です。

河邉　同感です。この園は、環境づくりへの配慮が実に行き届いていました。バケツなどを使って色水遊びをする園もありますが、この園ではキレイなガラス瓶などを用意していました。だからこそ、色水の美しさを十分に楽しむことができたのでしょう。またＢくんが瓶にセロハンテープを貼る姿を見て、「どうして瓶に直接書かないのだろう」と疑問に感じて理由を尋ねると、「テープをはがせば、（瓶は）また使えるから」と返ってきて、ふだんからモノなどの環境に正面から向き合っているのだなと思いました。このようにモノのすてきさや可能性をよく理解したうえで、それを「文化」として子どもに気づかせてあげることは、保育者の大切な役割だと改めて思いました。

※この解説は一例です。みなさんで話し合っていろいろな考えを出し合いましょう。

ケース２　＜事例を基に、「遊びの質」の高め方を考えてみましょう＞

事例提供◎磯部頼子

何とかグループには入れたけど……居場所が見つけられない子どもへの援助

場面❶「入れて」と言ってみたものの……

３人の女児（Ａ・Ｂ・Ｃ）は数日前からお気に入りの歌に合わせた振りつけや衣装を考えていました。今日はホールの片隅で踊り方を相談し、動きやポーズをそろえています。担任はそばで見ているＤちゃんに気づき、「Ｄちゃんもやりたいの？」と聞くと、Ｄちゃんはうなずきます。担任が「『入れて』って言えばいいのに」（援助❶）と言うとＤちゃんは「入れて」と言いますが、３人に断られます。しかし、担任が強くすすめて仲間に入ることになりました。

Ｄちゃんは３人を見ながら踊りますが、３人は何も言いません。そのうちにＤちゃんは「お客さん呼ぼう」と提案しましたが、３人は「まだ呼びたくない」と応じました。Ｄちゃんは保育室にいる担任に「お客さん呼びたい」と言うと、担任は「それはいいね。じゃあ、お客さんの席を」と応じて一緒にホールへ行き、３人に「お客さん、たくさん来たら楽しいね」と言いながら、Ｄちゃんと椅子を並べ始めました。３人は黙って見ています。椅子を並べ終えたＤちゃんは「お客さん呼んでくる」と、出ていきました。担任は「踊り方が３人違うところがあるけど、いつ始まるかな？ 楽しみに待ってるんだけど」（援助❷）と言って椅子に座りました。

場面❷ Ｄちゃんのおかげでショー形式に発展

同じホールで３人の遊びを見ていた先輩保育者が近寄ってきて、「あなたたち、いろいろ相談して、踊りをそろえるところと、それぞれ好きな振りつけで踊るところを決めていたんじゃないの？」（援助❸）と言うと、３人は顔を見合わせてうなずきます。先輩保育者は、「見る人は、そろっているところや一人ひとり違う踊り方があるとすてきって思うんじゃないかな」と言って、その場を離れました。担任ははっとした表情をしますが、何も言わずに出て行きました。

その後、３人は、そろえるところと好きなポーズをするところを確認し合い、初めから踊り始めました。Ｄちゃんは戻ってきて、集まってきた幼児を椅子に座らせます。曲が終わると、３人は「今のでいいね！」と満足そうに言葉をかけ合って確認し、Ｃちゃんが「もうすぐ始まりまーす！」と客席に叫ぶと、本番のショーが始まりました。

話し合いの視点

◎Ｄちゃんの思いやめあてはどのように変化しているでしょうか。
◎援助❶は適切だったのでしょうか。ほかにどのような援助が考えられるでしょうか。
◎自分なら、どの場面で、どのような援助をしたと思うでしょうか。
◎それぞれの子どもの満足度はどうでしょうか。

▶▶▶解説は次ページから！

ケース２ 河邉先生と磯部氏による解説

「お客さん集め」で居場所を見つけたDちゃんが次第に活動に深く関わる過程が興味深い

Dちゃんが遊びに入り込めなかった理由を2つの軸から分析

磯部　私が視察した園の事例です。援助❶のように、保育者は子どもがひとりでいると、どこかのグループに混ぜようとすることがあります。しかし、Dちゃんはその後の遊びについていけませんでした。最初の援助に少し無理があったと思います。

河邉　そこは私も気になりました。「遊び課題」「他者とのかかわり」という２つの軸から捉えると、この援助が妥当であったかが分かります。３人がどのような目的や課題をもって遊びを展開させてきたかという「遊び課題」、また３人がどういう関係を築いてきたかという「他者とのかかわり」のどちらにも、Dちゃんは関与していませんでした。その状態でいきなり参加してしまったのですから、入り込めないのは当然でしょう。ですので、仲間に入るとしたら、その前に３人がどういう課題をもって踊りをしてきたかなどをDちゃんが理解する必要があったと思います。

磯部　そうですね。Dちゃんの気持ちに寄り添うことは大事ですが、「あの踊りがすてきと思っていたのね。私もそう思うよ」などと、もっと共感的に受け止め、３人の遊びを理解する方向にもっていくとよかったかもしれません。また３人から断られたときは強くすすめず、「昨日からやっていたからね。すぐに入るのは大変かもね」などと、３人の視点から調整することも必要だったでしょう。その後、Dちゃんは居場所が見つからないもどかしさを味わいますが、そこから「お客さんを呼びたい」という自分なりのめあてをもち、居場所をつくることができました。

河邉　子どもは自分も仲間に入りたいとき、遊びの“周縁”をうろうろとし、どうすれば入れるかを考えます。Dちゃんもそういう気持ちでお客さん集めを提案したのでしょう。周縁の活動も遊びを支えるうえで大きな意味があります。実際、Dちゃんに見られることで３人は「自分たちはすてきだ」という気持ちを高めたかもしれません。またお客さんを呼ぼうと提案されたことで、その後の遊びの方向が明確になりました。

子どもの遊びの方向性を明確にした先輩保育者の言葉

磯部　援助❷と援助❸（ともに９ページ）を比べると、踊りがそれぞれバラバラのところがあることについて、ふたりの保育者が全く異なる視点で捉えていることがわかります。先輩保育者が３人の気持ちに寄り添って援助したおかげで、遊びは前に進みました。

河邉　次の方向性に確信をもてない３人に対し、「あなたたちがやっているのは、こういうことね」と方向づけた先輩保育者の言葉は、まさに遊びの質を高めたと言えるでしょう。

磯部　結局、Dちゃんはお客さん係として、最後まで踊りには入りませんでした。最終的に３人はお客さんに見られることを楽しんでいる様子でしたので、Dちゃんの活動も意味をもちました。さらに全員の気持ちを結びつけるために、３人に対して「Dちゃんがお客さんを呼んでくれて楽しかったね」といった言葉をかけてもいいかもしれません。Dちゃんのやりがいも深まると思います。

※この解説は一例です。みなさんで話し合っていろいろな考えを出し合いましょう。

遊びの質を高める援助 Q&A

遊びの質を高める援助についてよくある質問に、河邉先生がお答えします。

Q 具体的に、どのような援助をすれば、遊びの質が高まるのかイメージできません。こうすればうまくいくという援助のポイントはあるのでしょうか。

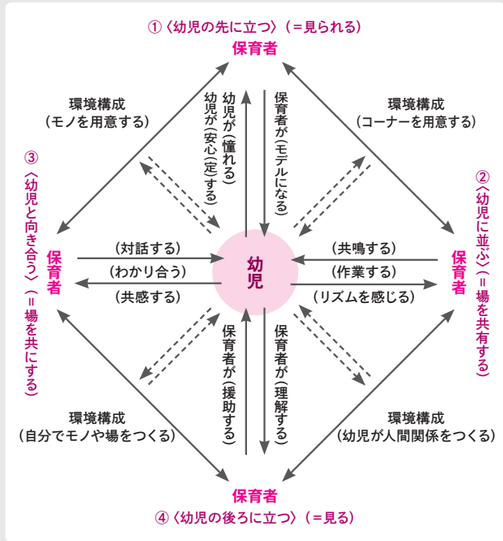
A 遊びに対する援助は、子どもの経験や関心、遊びの目的、友だちとのかかわりなど、さまざまな要因が折り重なって変化しますのでひとつの正解はありません。ただ、保育者に求められる役割のタイプを知っておくと、それをベースとして場に応じた援助を考えやすくなるでしょう。

小川博久先生が作成された「保育者の役割を構造化した図」をご覧ください（図４）。ここには、子どもに対する４つの役割が説明されています。

①幼児の先に立ち、「モデルになる」ことにより、子どもは保育者に対して憧れの気持ちをもったり、安心したりします。
②幼児に並び、「共鳴する」ことにより、子どもは作業に打ち込んだり、リズムを感じたりします。
③幼児と向き合い、「対話する」ことにより、保育者と子どもがわかり合い、共感が得られます。
④幼児の後ろに立ち、「見守る」ことにより、保育者は子どもの遊びをいっそう理解します。

どの位置から子どもを見るかによって、援助の中身が大きく変わることを意識していただきたいと思います。

図４ 全体把握と個の援助の連関を確立するための保育者の役割



出典：小川博久『保育援助論』（萌文書林）

Q 援助するうえで、適切なタイミングを見極めるコツはありますか。

A タイミングの見極めは、保育者の経験などによるところが大きいため、日頃から遊びを読み取る目を養いましょう。

援助のタイミングをイメージするために、子どもの遊びの勢いをこまの「回転」に例えて考えてみてください。保育者の役割のひとつは、どの遊びの「回転」が弱まってきているのかを見極めてサポートすることです。これを保育の場面に置き換えると、「動作が荒くなった」「モノの扱いが乱雑になった」「場が乱れている」などにより、遊びが崩れかけているときが、「回転が弱まった」タイミングと言えるでしょう。

もうひとつの役割は、例えばこまが勢いよく「回転」しているかのように遊びを自律的に展開しているグループに対しては、認めたり励ましたりすることです。実際の保育で考えると、子どもの工夫や努力に対し、「すごいね」「楽しそうだね」といった共感的な気持ちを言葉や態度で表します。その際には、「状況内存在」として、保育者が遊びの中に入り込むとより効果的です。例えば、新たな道具を提案したいときは、「これを使ったら、どう？」ではなく、「宅配便でお届けしました！」と手渡すなど、遊びの一員となることを心がけます。

ベネッセ教育総合研究所・CRN合同主催
ECEC研究会 開催報告

園の先生と研究者が立場を越えて、「遊びの質を高める保育」について熱く議論

2014年2月15日(土)、第3回となるECEC研究会が開催されました。
今、園現場で非常に関心の高い「遊びの質を高める保育のあり方」をテーマに、
保育の研究者と現場の園長などが車座になって語り合いました。当日の様子をご紹介します。

◎CRN（Child Research Net）とは

子どもを取り巻く諸問題に関心を寄せる研究者や実践家のネットワークを構築する、インターネット上の子ども学研究所です。ウェブサイトでは、医学や教育学、発達心理学、脳科学など、さまざまな学問の専門家による研究成果や、育児・保育・教育に関わる実践家・保護者によるレポートを、国内外から広く集めて発信しています。（日本語・英語・中国語の3言語で発信中）
http://www.crn.or.jp/

◎ECEC研究会とは

ECECとは、Early Childhood Education and Care(=人生初期の教育とケア)の略。次世代を担う子どもたちの保育・教育について、研究者や保育者が語り合う場として、CRNはECEC研究会を2013年に発足しました。これまでの研究の成果は、CRNウェブサイトでご覧いただけます。

第1部 基調講演＋パネルディスカッション

●基調講演

聖心女子大学教授の河邉貴子先生が登壇し、基調講演を行いました。本誌2ページからの河邉先生の記事は、この基調講演を基に作成しています。

●パネルディスカッション

河邉貴子先生、上垣内伸子先生（十文字学園女子大学教授）、大豆生田啓友先生（玉川大学准教授）そしてCRN所長の榊原洋一氏（お茶の水女子大学大学院教授）によるパネルディスカッションが行われました。以下、議論の中から、「遊びの質を高めるための保育記録の重要性」に関する提案をご紹介します。

CRN所長・榊原洋一氏の問題提起
「子どもの遊びを豊かにする援助をするために、保育記録はどのような役割を果たすのか」

河邉貴子先生の考え
「『こんなことをした』という行動の記録など、子どもを対岸に置くようにした保育記録では、子どもと保育者との相互関係は生まれてこない。そのときに自分が『どう感じたか』『何をしようと思ったか』『実際に何をしたか』『それを受けて子どもはどう変化したか』など、子どもとの関係性を踏まえた記録が重要だ」

大豆生田啓友先生の考え
「保育記録は、保育者が感じたことや発見したことなどを記録するエピソード型記録、そして俯瞰（ふかん）的な視点から記録するドキュメンテーション型記録の両方があることが理想的だ」

上垣内伸子先生の考え
「多人数を保育するには、ある程度、子どもの関心のありかを類型化することが重要。類型化とは、頭の中に大まかに子どもの関心のありかを分類するマップをもつことだ。一方で、一人ひとりを丁寧に読み取る記録も必要。個を尊重する視点をもちながら、クラスの1日のダイナミズムをどうとらえるかを追求することが、遊びの質を高めることにつながるのではないか」

第2部 ワークショップ

公私立、また幼稚園、保育所の園区分の違いを越え、8人の園長などが「『遊びが学びの保育』の実現を阻むもの」についてディスカッションしました。幼稚園と保育所のグループに分かれて議論した内容を発表し合い、全体で共有したところ、幼稚園・保育所グループに共通する課題が多く見つかりました。

提示された視点 「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの

幼稚園グループより

Ⓐ 保育者について
- 保育者自身の遊びの経験が不足していないか
- 子どもの体験を支える計画に課題はないか

Ⓑ 保護者について
- 保護者や社会の幼稚園に対するイメージにずれはないか
- 「遊びが学びである」ということが十分に伝わっているか

Ⓒ 園全体・園長について
- 行事が遊びや生活と乖離（かいり）していないか
- 園長の考えや園全体として、遊びを大切にしているか
- 園の独自性は大事だが、「独善」になっていないか

Ⓓ 場所について
- 園庭が狭く、遊びが広がらないことがないか

保育所グループより

Ⓔ 保育者について
- 保育者自身の遊びの経験が足りているか
- 保育者の生活経験は不足していないか
- 経験年数の短い保育者が増え、モデルとなる存在がいないのではないか（特に私立保育所）
- 保育者は子どもの気持ちに十分に共感できているか

Ⓕ 時間と空間について
- 遊びの時間や空間が細切れになっていないか
- 記録する時間は十分に確保できているか

Ⓖ 園全体・園長について
- 園長は、保育者の自主的な判断をきちんと受け止めているか
- 安全面による制約は過度になっていないか

第3部 フリーディスカッション

第1・2部に参加した全てのパネリストと現場の園長などに、一見真理子先生（国立教育政策研究所総括研究官）と磯部頼子氏（ベネッセ教育総合研究所顧問）を加え、フリーディスカッションが行われました。これまでのプログラムで提示された課題などについて踏み込んだ議論を展開し、「遊び」を中心とした保育をいかに充実させ、その意義を社会に広げていくかを語り合いました。

保育者の資質を高めるには

私立幼稚園主任「保育者の遊びや生活経験には限界があるため、チーム保育の視点を大切にするべき」

公立保育園長「あえて若い保育者を担任にして『あなたががんばらないと、子どもは伸びない』と発破をかけると、奮起してよいクラスができた」

大豆生田啓友先生「一人ひとりのよさを生かし、保育者同士が学び合っている園は良い。すてきな園は、むしろ経験年数が多い保育者ほど、若手から学んでいる」

園長に求められる資質とは

私立幼稚園主任「保育について確固たる考えをもち、保護者や地域社会に対して丁寧に語れること」

公立保育園長「園長も、いち保育者なのだから、徹底的に一緒に保育について語り合うことが大切」

まとめ 保育現場で今、大きな関心を集めている「遊びの質」。子どもの育ちにとって重要なこのテーマを考える第一歩として、幼稚園・保育所という園区分の違い、さらに園現場の先生と研究者という立場を越えた議論が行われました。幼稚園・保育所に共通する課題や、現場の先生・研究者に共通する意見が多数見つかったことは大きな成果でした。CRNのECEC研究会とベネッセ教育総合研究所は、今後、日本だけでなく海外の保育の現状も視野にいれて研究を深めていきます。どうぞご期待ください。

『これからの幼児教育』編集長 橋村美穂子

この研究会の詳しい内容は、CRNウェブサイトでご覧になれます。▶▶▶ http://www.crn.or.jp/

データで見る 園運営の今

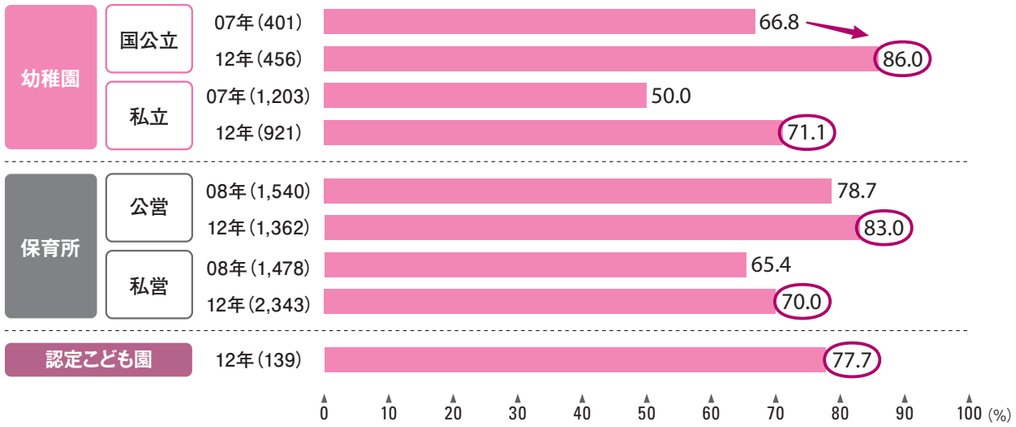
ベネッセ教育総合研究所は、2012年10～12月に園長等を対象に、園の教育・保育活動、園の体制などの実態を明らかにすることを目的にアンケート調査を実施しました。今回は、2014年2月に発刊された「第2回 幼児教育・保育についての基本調査報告書」の中から、園運営に関わるデータを中心に紹介します。今後の園運営を考える材料のひとつとして、ぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ教育総合研究所「第2回 幼児教育・保育についての基本調査報告書（2014）」）。

7～8割の園が「特別に支援を要する子どもや障害のある子どもがいる」と答えている

Q 貴園に、障害のある子どもや特別に支援を要する子どもはいますか。

図1 特別に支援を要する子ども等がいる園の比率（園の区分別・経年比較）



注1）調査年によって、聞き方が若干異なっている。07年の幼稚園調査では「貴園には、特別な支援を必要とする園児はいますか」、08年の保育所調査では「貴園に、障害児や特別に支援を要する園児はいますか」、12年調査では「貴園に、障害のある子どもや特別に支援を要する子どもはいますか」とたずねている。
注2）認定こども園は12年調査がはじめての調査となるため、経年のデータなし。
注3）（　　）内はサンプル数。

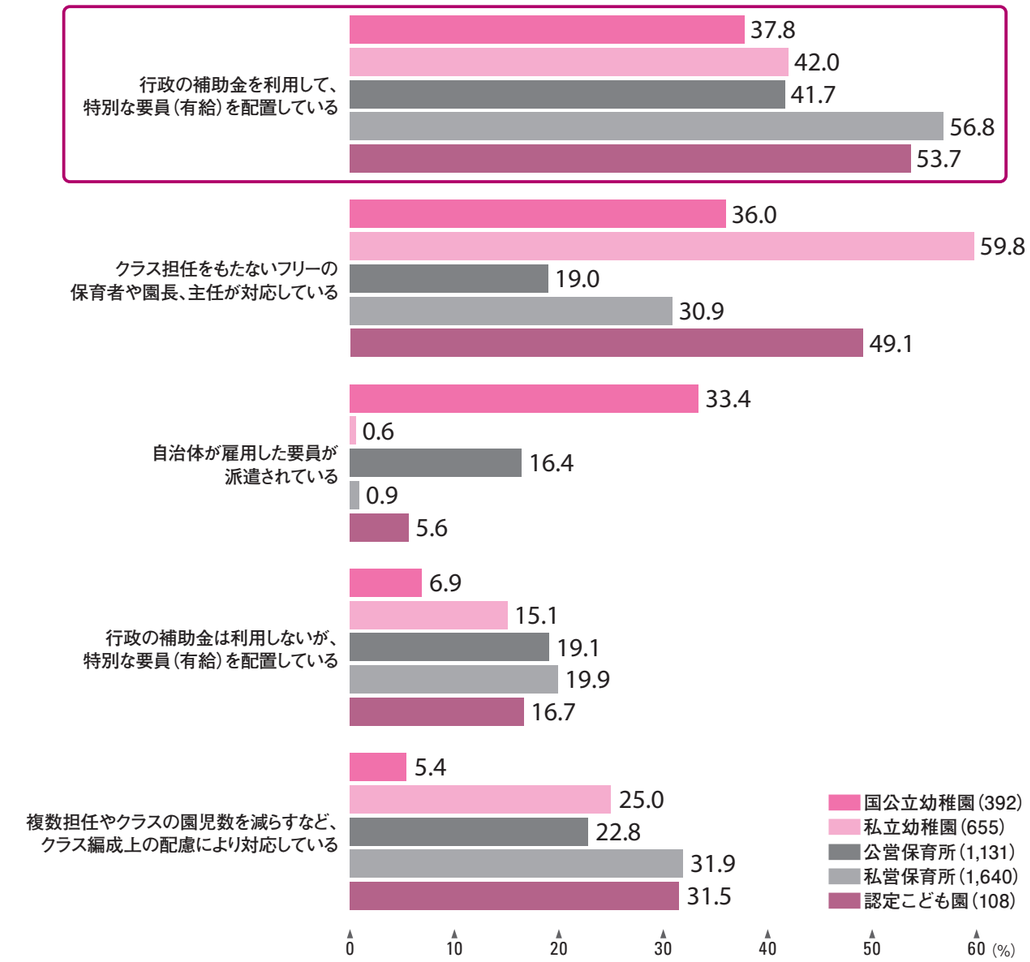
研究員解説 特別支援に関しては、まず園に障害のある子どもや特別に支援を要する子どもがいるかどうかについてたずねました。12年調査の結果をみると、全体では7割～8割の園が「いる」と回答しています。経年でみると、幼稚園では、07年の第1回調査時点から「いる」の回答率が約20ポイントも上昇しています。公営保育所は経年の変化が少ししかみられませんが、08年の第1回調査時から高い選択率でした。もうひとつの特徴として、国公立幼稚園・公営保育所では、「特別に支援を要する子どもがいる」と答えた率が私立幼稚園・私営保育所より高い傾向であることが言えます。また、8割弱の認定こども園が「いる」と回答しています。国公立幼稚園、公営保育所と私立幼稚園、私立幼稚園と私営保育所の間に位置していることがうかがえます。

邵勤風（しょうきん ふう）研究員◎ベネッセ教育総合研究所主任研究員。本調査のほか幼児～小・中学生の子どもをもつ家庭を対象とする調査研究に携わる。

特別支援の体制として、4割弱～6割弱の園が「行政の補助金を利用して特別な要員」を配置

Q その子どもの支援のためにどのような体制をとっていますか。

図2 特別支援を行うための体制（園の区分別）



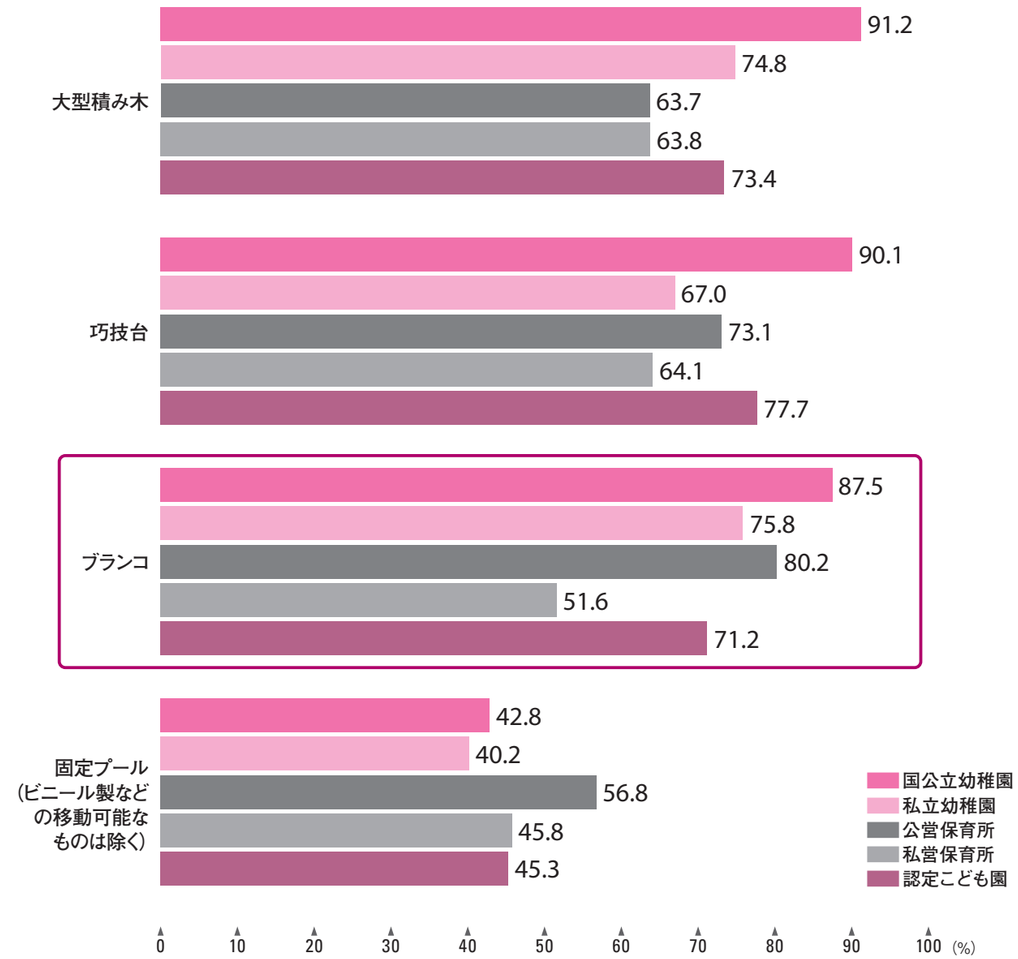
注1）「貴園に、障害のある子どもや特別に支援を要する子どもはいますか」とたずねた質問で、「いる」と回答した園のみを分析。
注2）「その他」を含めた9項目のうち、5項目を図示。
注3）複数回答。
注4）（　　）内はサンプル数。

研究員解説 特別支援を要する子どもが「いる」と選択している7～8割の園に対して、さらに「その子どもの支援のためにどのような体制をとっているのか」についてたずねました。支援体制に関して、3つの特徴がありました。1つめは、園の設置形態と関係なく、4割弱～6割弱の園が「行政の補助金を利用して、特別な要員（有給）を配置している」と回答していることです。2つめは、「自治体が雇用した要員が派遣されている」については、国公立幼稚園が3割、公営保育所が1割5分で、ほかの園は1割未満にとどまっていることです。公立園は比較的、自治体からのサポートを受けていることがわかります。3つめは、「クラス担任をもたないフリーの保育者や園長、主任が対応している」は園の設置形態によって、選択する率が異なっていることです。

ブランコの設置は園種別によって、大きく異なっている

Q 貴園には次にあげる環境や設備はありますか。

図3 園の環境や設備（園の区分別）



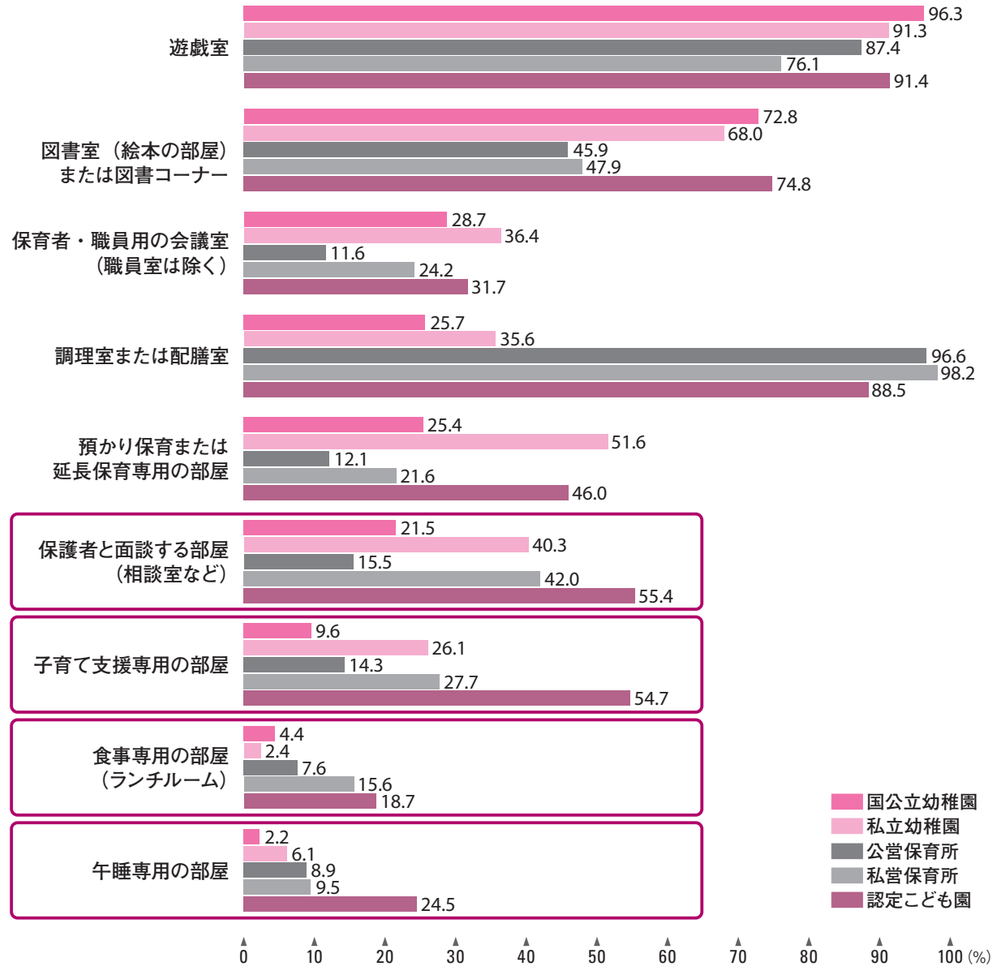
注1）複数回答。9項目のうち、園の区分による特徴が出ている 4項目を図示。
注2）サンプル数は図1と同様のため、記載を省略した。

研究員解説 園で有している環境や設備については、計9項目をたずねています。特徴としては、「園庭」「砂場」「ピアノなどの鍵盤楽器」「すべり台または複合大型遊具」「栽培活動ができる花壇や畑」はどの園区分でも約9割以上と高い所有率です（図表略）。一方、「大型積み木」「巧技台」「ブランコ」「固定プール」は園の区分によって、設置率が異なる傾向にあります。「大型積み木」の設置状況をみると、国公立幼稚園がもっとも高く約9割で、私立幼稚園と認定こども園がそれに次いで、7割で、公営・私営保育所は約6割です。「固定プール」についてはほかの設備と比べ、全般的に設置率が低いのが特徴です。その中で、公営保育所はほかの園区分より10ポイント以上高く、5割以上の園が有していることがわかります。「ブランコ」は私営保育所がほかの園区分と比べ、20ポイント以上低く、5割にとどまっています。低年齢の子どももいる保育所では危険性があること、またスペースの確保が難しいことが原因であると考えられます。

認定こども園は保護者との面談、子育て支援、食事、午睡など専用の部屋の設置率が高い

Q 貴園には次にあげる環境や設備はありますか。

図4 園が設置している専用の部屋（園の区分別）



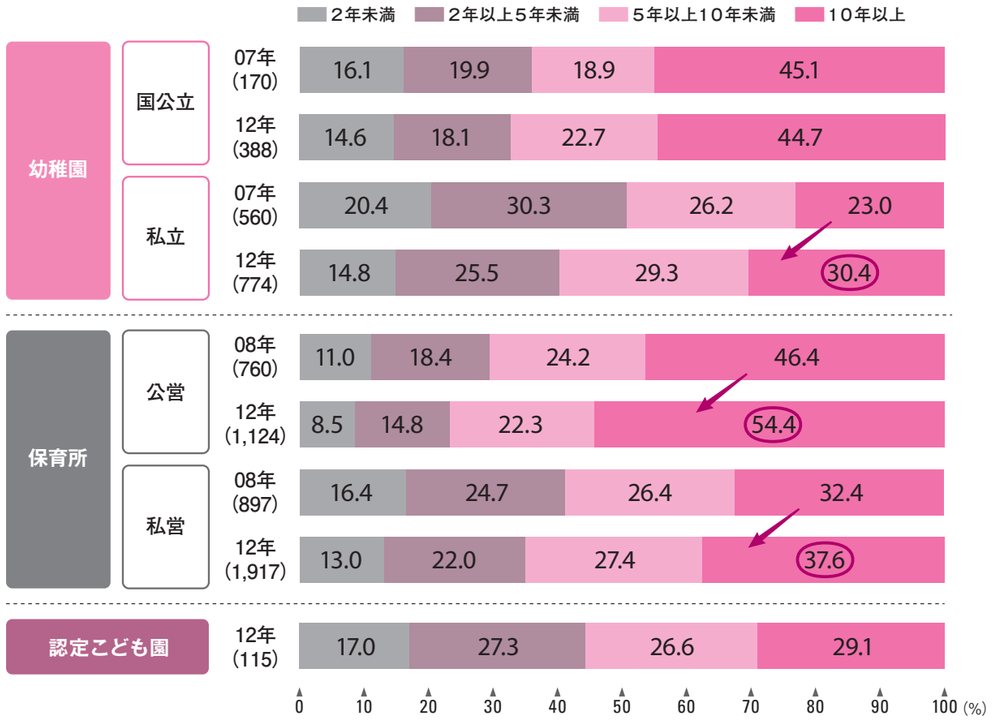
注1）複数回答。
注2）サンプル数は図1と同様であるため、記載を省略した。

研究員解説 園が設置している専用の部屋をみると、「遊戯室」はどの園でも高い所有率です（約7割～ 9割）。それ以外は園の区分によって、所有率がかなり異なることがわかります。例えば、「図書室（絵本の部屋）または図書コーナー」は幼稚園と認定こども園が7割前後に対して、保育所は5割弱です。一方「調理室または配膳室」は保育所と認定こども園が9割弱～9割の所有率であるのに対して、幼稚園は2割～ 3割にとどまっています。「子育て支援専用の部屋」は認定こども園が5割を超えていますが、ほかの園は1割弱～ 3割弱です。「午睡専用の部屋」はどの園でも設置率が低い傾向にありますが、その中で認定こども園は比較的に高く、2割となっています。これらの設置率の差は、園で過ごす時間が長時間である保育所や、子育て支援が義務づけられ、園で過ごす時間が異なる子どもを預かる認定こども園など、園区分の特性や設置の主旨の違いによる影響だと考えられます。

私立幼稚園、公・私営ともに保育所では「10年以上」の経験をもつ保育者の割合が増加

Q 園長・所長・施設長、副園長（教頭）・副所長・副施設長、主任（担任をしない）を除く保育者の経験年数を教えてください。

図5 保育経験年数別の保育者の比率（園の区分別・経年比較）



注1）第1回調査は07年に幼稚園、08年に保育所で実施している。認定こども園については、12年調査は初めての調査となるため、経年データなし。
注2）各園の経験年数別の保育者比率を出し、その平均値を算出した。保育者合計数と、保育者経験年数別の内訳が合致した園のみを分析。
注3）（　　）内はサンプル数。

研究員解説 保育者の経験年数について、それぞれの園区分の保育者全体での割合を「2年未満」から「10年以上」と、4つの区分に分けて、経年による変化をみたところ、国公立幼稚園はほとんど変化がみられませんでした。私立幼稚園、公営・私営保育所では「10年以上」の経験をもつ保育者の割合が増えています。また全体的に、「10年以上」の保育経験がある保育者は、国公立幼稚園と公営保育所では高い一方、私立幼稚園・私営保育所は比較的低い傾向がみられます。認定こども園では「2年以上5年未満」、「5年以上10年未満」、「10年以上」の経験をもつ保育者がほぼ同じ割合です。ベテラン保育者と若手保育者、バランスのとれた保育経験をもつ保育者の構成は園内研修や保育者同士の学び合い、さらに質の高い幼児教育・保育の提供に関係し、大変重要でしょう。

出典：『第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書』（2014年）
調査対象：園児数30人以上（一部、園児数不明の園も含む）の国公私立幼稚園、公私営認可保育所、認定こども園の園長等（※）
※ 園長・所長・施設長、副園長（教頭）・副所長・副施設長、主任など。
有効回答数：発送29,100園、回収5,221園
調査時期：2012年10月～12月
調査地域：日本国内全域
調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
調査項目：環境や設備／保育者の状況／教育・保育目標／教育課程・保育課程／指導計画／教育・保育活動／子育て支援／保育者研修／障害児対応の体制／園の課題／認定こども園への移行など
※調査票は、幼稚園版・保育所版・認定こども園版の3種類を作成。共通項目と、各施設ごとの項目から設計。

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。▶ http://berd.benesse.jp

調査データを踏まえ、園ができる支援について考える

円滑に園運営を進めるためには、人を育て、チーム力を高めることがカギに

保護者のニーズ、保育環境や保育者構成など、園を構成するさまざまな要素が多様化していることがデータから明らかになりました。これからの園の運営では、どのようなことを心がければよいか、東京成徳大学教授の塩谷香先生にうかがいました。

東京成徳大学教授
塩谷　香
しおや・かおり
専門分野は保育学、保育の実践的研究。主な編著書に『幼稚園幼児指導要録・保育所児童保育要録記入ハンドブック』（ぎょうせい）など、今回紹介した調査の分析メンバーでもある。

チーム力を高めて子どもを多角的に見る

今回の調査からは、特別に支援を要する子どもが増えていることや、園種による環境や人員層の多様化が進んでいることがわかりました。このように、各園を取り巻く環境が変化する中でよりよい園運営を実現していくためには、「チーム力」と「人を育てる」ことがカギになるのではないかと私は考えます。

例えば、特別支援で大切なのは、支援が必要な子どもや保護者だけをケアするのではなく、まわりの子どもや保護者を含めた全体の保育をどうするかを考えることです。

こうした広い視野に立って考えるためには、担任ひとりの力では限界があります。大切なのは現場の「チーム力」を高め、職員全体で課題に対応していくことです。そうすることで、子どもをさまざまな角度から見ることができるようにもなります。例えばひとりの子どもを、「この子は落ち着きがない子」と見る先生もいれば、「好奇心が強い子」と見る先生もいるでしょう。いろいろな視点から子どもや保護者の様子などを共有することで、よりよい対応策が見えてくることが多いと思います。

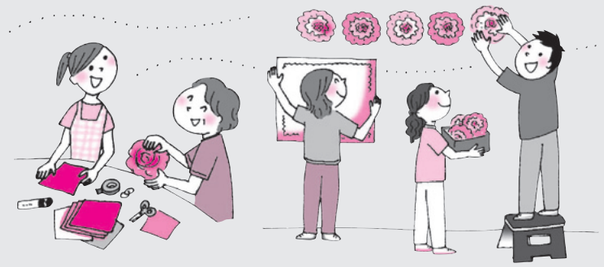
現場の「チーム力」を高めるためには、研修を充実させるなどして、「人を育てる」という意識をもつことが大切です。特に今の若い世代は、いろいろな人と接する経験などが不足しており、伝える力も弱いです。

まずは、若手の先生が意見を言いやすくなるように、ふだんから「何を言っても大丈夫」という風通しのよい雰囲気をつくっていただきたいと思います。また、若手の先生には「どのように子どもを育てたいのか」を表明してもらうのもいいですね。自分の思いをまわりにわかりやすく伝えなければいけないので、子どもの発達や保育の意義を深く考える必要があり、力がついてくるでしょう。

また、責任感や自主性を育てるためには、助言をしながらも、最終的には若手の先生の判断を尊重するという姿勢も大切なことです。自分の意見を尊重してもらいながら育った保育者は、10年後には「人を育てる」という視点をもった保育者になれるでしょう。そうした良い循環ができれば、自ずと「チーム力」も高まると思います。

長時間保育児が気持ちを切り替えやすい環境を

また、今回の調査では、「預かり保育や延長保育の専用の部屋」の設置率が低いことが少し気になりました。今後、長時間保育の子どもが増えると予想されますが、長時間保育になると、夕方以降は家庭的な環境で過ごすなど、子どもが気持ちや行動を切り替えられるように配慮することが大切です。そのためにも、「延長保育」専用の部屋があるといいのですが、専用の部屋が設けられない園もあると思います。その場合は、出すおもちゃを変えたり、場所を移動したりするなど工夫するだけでも効果はあります。ぜひ、園でアイディアを出し合ってみてください。



先生同士の「同僚性」を高める

保育に対するニーズが多様化する中で、保育の質を高めていくために、
保育者が互いに学び合う風土づくりが求められています。
園全体で専門性を高めるための「同僚性」について考えます。

はじめに　◎同僚性とは何か？

同僚性は保育者の専門性向上のカギ

広島大学大学院教育学研究科准教授　**中坪 史典**

互いに支え合い、高め合うのが同僚性

「同僚性」とは、簡単に言えば、保育者同士が互いに支え合い、高め合っていく協働的な関係のことです。小学校以降では、同僚同士が授業を見合い、それぞれの知識や経験を行き来させながら、相互に授業力を高めていけるような関係やあり方を指します。園では「授業」は存在しませんが、園内研修などを通して子ども理解を深め、専門性を高め合う関係をイメージするとよいでしょう。

近年、園の現場では保育者の多忙感の増大、多様化する保護者のニーズへの対応などの問題に直面しており、心の健康を損なう人も少なくありません。そうした状況へ保育者が個別に対応するのは限界があり、チームとして問題に取り組むことが必要です。そうした意味で、保育に携わるかたがたにとって、同僚性はとても重要なテーマと言えます。

授業という枠がなく、教科書が存在しない保育では、保育者は常に即時的・即興的に子どもに対応していくことが求められています。保育が即時的・即興的であるからこそ、保育者が自分の専門性を高めようとするときには、同僚の保育者と自らの保育を振り返る作業が欠かせません。保育者同士が互いに学び合えれば、「こんな見方もあったのか！」と、自分の子ども理解を根幹から問い直し、保育者として大きく成長を遂げる場面にも出合えるかもしれません。書物を読んだり、講演を聞いたりすることも大切ですが、保育者がチームになって、お互いの保育から学び合うことが何より重要なのは、保育の特徴だと私は思います。

保育への期待が高まる今、園長先生には自園全体の専門性を高めるために、同僚性についてぜひ考えてみていただきたいと思います。

なかつぼ・ふみのり
専門は保育・幼児教育学。保育現場のフィールドワークを中心に、保育者の専門性や保育カンファレンスに関する研究、保育の質が子どもの発達に及ぼす影響などの研究を行う。

座談会

学び合う風土をつくるために園長は何をすればよいのか？

同僚性を高めて、保育者同士が学び合う風土をつくるために、
園長先生は何をすればよいのでしょうか。ふたりの園長先生、そして中坪先生に
同僚性の重要性から、その具体的な高め方について話し合っていただきました。

広島大学大学院
教育学研究科
准教授　**中坪史典**　なかつぼ・ふみのり

はっと保育園
（兵庫県・私立保育園）
園長　**片山喜章**　かたやま・よしのり

かえで幼稚園
（広島県・私立幼稚園）
園長　**中丸元良**　なかまる・もとよし

同僚性を高めることは保育の質を高めること

片山　近年、保育の現場において、「同僚性」は大きな関心を集めるテーマとなっています。そもそも私は、保育者の同僚性と保育の質は密接につながっていると考えています。「こういう子どもに育ってほしい」という願いは、「こういう社会になってほしい」という願いと同じです。異なる価値観を受容し、共生できる人に育ってほしいと願うのであれば、まず私たち大人がそうした社会、職場をつくるよう努力しなければいけません。

中丸　保育者と子どもの関係は、園長と保育者の関係と相似形ですよね。園長の指示にただ従うばかりの保育者に、子どもの主体性を引き出す保育ができるかといえば、それは難しいでしょう。子どもの主体性を伸ばしていく保育を目指すのであれば、園長には保育者の主体性を尊重する姿勢が必要でしょう。

中坪　年齢が上の人は導く役割で、年齢が下の人はそれに従うのが美徳であると考える日本的な気風がまだ残っている園も現実にはあるでしょう。そうした中では、年齢の若い人が自発的に会議の場で発言することは決して簡単ではないはずです。

中丸　しかし日本の社会のあり方が変化し、これまでとは子どもを取り巻く環境も大きく変わったことで、社会性の育成など園が担う役割はより大きくなっています。園への期待が大きくなっているからこそ、保育者個々の知識や経験だけに頼るのではなく、チームの力で子どもを育むことが求められていると思

います。

片山　社会が大きく変わっているのに、保育の現場では保育者の意識がその変化に追いついていないのかもしれません。だから、ベテランの経験が優先され、上意下達で動く組織になりがちです。そうした中で、同僚性という言葉が聞かれるようになったのは、現場に変化の兆しが少しずつ表れてきたのでしょう。

多忙化する今だからこそ園長のしかけが重要に

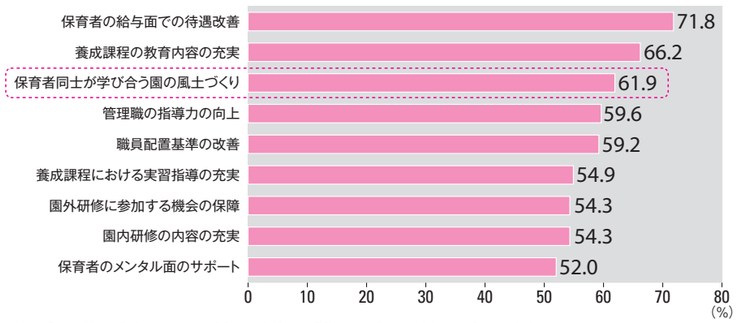
中丸　ただ、保育者間のコミュニケーションを豊かにしようとしても、保育の長時間化によって、保育者の多忙化が進み、難しくなっていることも事実です。時間にゆとりがなくなっているため、保育者同士がちょっとした雑談をする余裕もなくなっている気がします。本来は、そうした雑談を通して子ども理解を互いに深め合い、そんなやりとりの中で同僚性が育まれていたはずです。今の園は、やるべきことが多すぎて、実践の中で保育者が語り合い、情報交換し、信頼関係を醸成することが難しくなっています。

中坪　実際私も、「同僚性の大切さはわかるけど、みんなが集まって話し合うような機会がなかなかつくれない」という現場の声をよく耳にします。限られた時間の中でたくさんの仕事を処理しようとすると当然効率性が求められますし、効率性を重視するほど、会議のあり方もトップダウンの伝達型になっていかざるを得ません。園長先生はみんなから意見をくみ上げたいと考えているのに、時間がかかるから実際にはできていないというケースも多いでしょう。

片山　多忙化は多くの園に共通した課題です。だからこそ、園長は「保育者同士のコミュニケーションを豊かにしましょう」「年齢にとらわれず、自由に意見を言いましょう」と声をかけるだけではなく、具体的なしかけをしていく必要があると思います。

参考データ　保育者の資質向上のために必要なこととは？

保育者の資質向上のために、「保育者同士が学び合う園の風土づくり」が重要であると考えている園長は多い



注）複数回答。「その他」を含む28項目のうち、50%以上の選択率だった９項目のみ図示。
出典：ベネッセ教育総合研究所「第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書」（2014年）

会議の人数、構成、小道具などを工夫する

片山　まず、会議はあまり大人数にならないようにすることが重要だと思います。私の園では、保育者を5人程度の複数のグループに分けて会議をすることが多いんです。

中丸　メンバー編成にもひと工夫できますよね。例えば、ベテラングループと若手グループを分けて会議を行うことがありますが、若手が臆せずに意見を言えるというメリットだけでなく、ふたつのグループの意見をすりあわせることで、「こんな見方をしているのか」と視点の違いに気づくことができます。

中坪　みんなが発言できる会議にするための最適人数は、３人から５人と言われていますね。私も、大学の講義などでグループをつくるときはそのくらいの人数を心がけています。６人グループで話し合いをするなら、いったん３人グループをふたつつくった方が、会議は活性化するかもしれません。

中丸　また、私の園では会議でホワイトボードをよく使っています

が、書記はできるだけ私自身が務めるようにしています。そうすることで、園長があまり口を出さず保育者の意見を反映できますし、私が会議の流れを視覚化することで、若い保育者も論点を理解しやすくなっているように思います。園長として、たくさん発言しなくても、園全体の議論を促進することはできていると感じています。

片山　進行中の議論を視覚的に整理するのには力が必要ですから、まさに園長の役割でしょうね。議論を促進するような書記役を務めることができれば、園長が「発言してください！」とお願いしなくても、議論はきっと盛り上がるはずです。

中坪　ホワイトボードのような小道具として、付箋を使うのも有効です。例えば、写真を見ながら子どもの気持ちについて気づいたことを付箋にひとつずつ書いていけば、付箋に書くということを通して、全員に発言の機会が保証されます。また、付箋にはひと言ふた言のポイントしか書けませんから、周囲から「これはどういうこと？」と尋ねられることでさらに対話が展開していくでしょう。

インターネットを活用したコミュニケーションも有効

片山　会議の場で、経験や年齢の差を越えてみんなが活発に発言できるように、私の園では職員のメーリングリストを活用して、会議の１週間前に議題を発信し、保育者が自由に意見を述べられるようにしています。みんなの前で発言するのは苦手でも、メールでの文章にまとめることは得意な若手保育者は少なくありません。１週間もすればさまざまな書き込みがあり、誰が何を考えているかがわかったうえで会議に臨めます。会議の論点が明確だから、「自分も意見を言いたい！」と会議をむしろ楽しみにしているようです。確かに職歴の浅い保育者が、少ない経験をもとに思い込みのような考えを先輩にぶつけてしまう場面もあります。しかし、そうした若手の意見もベテランが受容していると、時間の経過とともに若手自身が「自分はこんな恥ずかしいことを言っていたのか」と自ら気づき、学んでいきます。

中坪　私も、若い保育者がブログ形式でその日の保育を書きとめ、それに対して同僚の保育者がコメントを寄せて、互いに保育を振り返っているケースを聞いたことがあります。もちろん個人情報の取り扱いには十分に注意しなければなりませんが、インターネットなどを活用したコミュニケーションも、同僚性を育むきっかけのひとつとして有効でしょう。

片山　保育園は保育者の勤務スケジュールが同じではなく、全員が集まるのが難しいので、インターネットを介したコミュニケーションも現実的で有効です。若い保育者が子どもへの思いを綴ったメールを読むと、本当は若い保育者も、子どものことを熱く語り合う場を求めているのだなあと実感します。

中坪　会議の前に意見を述べ合う場合、抽象的なテーマではなく、できるだけ個別的・具体的な話題にすることも重要でしょう。片山先生の園で若手がどんどん意見を書けるのは、具体的なシーンについて議論しているからだと思います。実際の会議の場でも映像や写真を前に、子どもの気持ちをみんなで考え合うような研修の方が議論は活性化しやすいですからね。

同僚から学ぶ姿勢を園長が率先して示す

中丸　園内研修で保育者が子どものことを語っているとき、「日々の保育のことはよく知らないから…」と園長が離席してしまうケースがあると聞きます。しかし私は、保育者が子どもを語るときこそ、園長はそこに同席し、耳を傾けるべきだと思うのです。そして反対に、例えば職員採用や園内環境の改善など、最終的には園長が意思決定するよう

同僚性の高い風土をつくる！ 園長先生の３つのアクション

❶会議のあり方、進め方を工夫する
- 会議は３～５人の少人数で行う
- ベテランと若手を分けて会議するのも一案
- 園長先生は書記を務め、保育者の発言を引き出す
- 付箋を活用し、全員に発言の機会をつくる
- インターネットを使って、事前に意見交換する

❷若手が安心できる雰囲気をつくる
- 重要なテーマこそ、保育者に発言の機会を与える
- 園長先生自身が他の保育者に学ぶ姿勢を示す
- 「責任は園長がとる」という態度を明確にする

❸自園の強みを踏まえて園の理想を語る
- 自園の強み、一人ひとりの保育者の長所から、園の理想像を前向きに語ったうえで、その実現のために何をすべきかを考える

な案件こそ、むしろ園長抜きで保育者たちに自由に意見を言ってもらい、声を吸い上げたいと思っています。実際、決めるのは私であっても、いろいろな見方があることに気づき、こちらも視野が広げられる思いがすることが多々あります。答えが簡単に出そうにないと思うテーマほど、私は保育者に相談するように心がけています。実は今回も、「同僚性というテーマで座談会に参加するのだけど、みなさんは同僚性についてどう思いますか」と話を聞いてきました。大事なことについて保育者に広く意見を求めることで、「園長は自分たちを信頼している」と同僚性の醸成につながるのではないでしょうか。

中坪　中丸先生の描く園長像は、引っ張る人、指示を出す人というよりも、同僚から学ぶ姿勢を率先して示す人なのでしょうね。園長という立場で若い人たちに意見を求めるのは決して簡単ではないと思いますが、リーダー自らが同僚に心を開いていることは保育者のみなさんにきっと伝わっているはずです。

片山　責任は園長がとるから、みなさんは自由に、自分の意見、信念を語ってほしいという姿勢を貫くことが大切ですよね。保育者の意見が正しければ大いにほめるけれど、仮に間違って失敗しても、意思決定者は園長なのだから責を問うことはしてはいけませんよね。保育者がのびのびと子どもに接することができるように、園長は保育者に対して、失敗を寛容する気持ちで向き合うことを常に心がけたいものです。

中丸　園長は確かにトップですが、精神的には同僚を下支えする存在、受け皿でありたいですね。

自園の強みに目を向け理想を語り合う

中坪　同僚性を高めるために、園長先生に心がけていただきたいのはポジティブアプローチという考え方です。園に限らず、多くの会議では抱えている課題を明らかにし、その克服のためにすべきことを議論します。園内研修でも保育者の子ども理解の「間違っているところ」を指摘することが多くなりがちです。もちろんそうした研修も大切なのですが、それだけに終始すると保育者は前向きな気持ちになりにくいものです。反対に、自園の強み、保育者個々のよいところを探し、それをもっと伸ばしていったとき、チームとして園はどんな状態になれるかを思い描き、そのために何をすればいいかを議論するのがポジティブアプローチです。どんな取り組みでも積み重ねていくためには、楽しく、無理がないことが大切です。園長先生が前向き思考でいることで、保育者は「やってみよう」という気持ちになるのではないでしょうか。

片山　子どもの記録でも、問題点に目を向けるのではなく、まずはその子のよいところを探していくことで、保育者は前向きになれるし、担任以外の保育者も記録作りに参加しやすくなりますよね。保育者同士の関係でも、いいところを探し合う方がキャリアの差を気にせずに意見を言いやすいはずです。私の園では中長期計画などを立てるときも、とにかく理想、夢を詰め込もうと呼びかけていますが、そうして前向きな集団になって初めて、現状を見つめ、弱点を飲み込んでしまう力が出てくるように思います。

中丸　目標が大きいほど、ベテランだけの力では実現が難しく、みんなで向かっていく必要が出てきますからね。そもそも、私たちが向き合っている子どもは、常に前向きな存在で、転んでも、失敗してもまた笑顔でがんばっています。そうした子どものあり方を学ぶことが必要なのかもしれません。

中坪　育ち合える人間関係をつくるためには、一人ひとりの自己開示が大切です。園内研修などで、ひとりの保育者が素朴な疑問を率直に打ち明けたことをきっかけに、保育者全員が「自分の言葉で素直に語っていいのだ」と理解し、それ以降、保育者間のコミュニケーションが活発になることがあります。自己開示しやすいリラックスした雰囲気をつくるのは、園長先生の役割でしょう。お茶やお菓子を楽しみながら、園長先生がときには自らの失敗や悩みを吐露することが、同僚性を高める一歩になると思います。

読者アンケートから

Reader's Voice

2014年春号特集「集団の中で『主体性』を育むために園ができること」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生がたからのご意見をご紹介します。

＊『これからの幼児教育』のバックナンバーは、「ベネッセ教育総合研究所」のウェブサイト（http://berd.benesse.jp）でご覧いただけます。

◎鯨岡先生のインタビューを読んで、「繋合希求欲求（けいごうききゅう）」という言葉を初めて知りましたが、「なるほど！」ととても納得しました。私は今、年長児を担任しているのですが、まさにこの自己充実欲求と繋合希求欲求のバランスがうまくとれるような保育を心がけているので、とても参考になりました。（栃木県・私立幼稚園）

◎品川区立平塚すこやか園の「運動会」の中での主体性を育てる保育は、とてもわかりやすく、同じ公立園として参考になりました。まず、基礎となる部分に、保育者との信頼関係があり、そのための適切な言葉かけ、見守り、援助など、質の高い保育に感心しました。子どもたち一人ひとりの丁寧な見方や方向性の出し方など勉強するべき点がたくさんありました。「～してあげる」「～させる保育」から、一緒に考え、子どもの気持ちを引き出す保育への転換が必要だと気がつきました。（富山県・公立幼稚園）

◎子どもを「主体」としてとらえることが大切であるとわかっていても、実際の保育が始まるとクラス一人ひとりの「主体」を考えてばかりいられないジレンマの中で、現場の先生たちが日々、葛藤しながら、子どもと向き合っています。そのような中で、鯨岡先生の「『私』と『私たち』ふたつの心が主体をつくる」という見出しが心に響きました。子どもの「主体性」に光がさした感じがし、すぐに現場の先生たちに紹介しました。これから、この内容をどう保育に活かしていけるか……実践あるのみです！（岐阜県・私立幼稚園）

◎大人がよかれと思っていることが、子どもにとっては過剰な援助である場合がある……この言葉にハッとさせられました。手助けしてやることが保育者の援助と思いがちですが、自分から何かをしようという気持ちが起こるような援助をしていきたいです。（三重県・公立幼稚園）

◎鯨岡先生の解説を読んで、「そうそう！」と共感したり、「私もこういうことが言いたかった！」と納得したりしました。「私たちは自分で自分を好きになるから満足なのではなく、実は周囲の人が認めてくれる自分だからこそ、自分のことを肯定できるのであり、実際には他者の存在が欠かせません」という内容は本当に共感しました。このような保育が実践できたら、子どもの自尊感情が高まると思いました。（大阪府・公立幼稚園）

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

取材で、ある園の園庭を見学しました。子どもの遊びの質を考えた工夫が園庭にちりばめられていて、感動しました。でもそれがわかったのは園長先生から補足説明を受けながら見学したからこそ。自分の目で見ただけでは気づかない点ばかりでした。保護者も私と同じかもしれません。保育の「結果」だけでなく、「先生がたの思い」を伝えることが大事だということを痛感しました。（橋村）

『これからの幼児教育』2014年夏号　2014年5月31日発行

発行人　谷山和成
編集人　小泉和義
発行所　（株）ベネッセホールディングス
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太
撮影協力　ヤマグチイッキ、荒川潤、谷口哲
イラスト協力　アサヌマリカ

お問い合わせ先
◎情報編集室
〒206-0033 東京都多摩市落合1-34
電話：042-311-3390

※本誌は最新号・バックナンバー等の追加発送は行っておりません。すべての記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからPDFでご覧いただけます。ぜひご利用ください。
http://berd.benesse.jp

©Benesse Holdings,Inc. 2014